

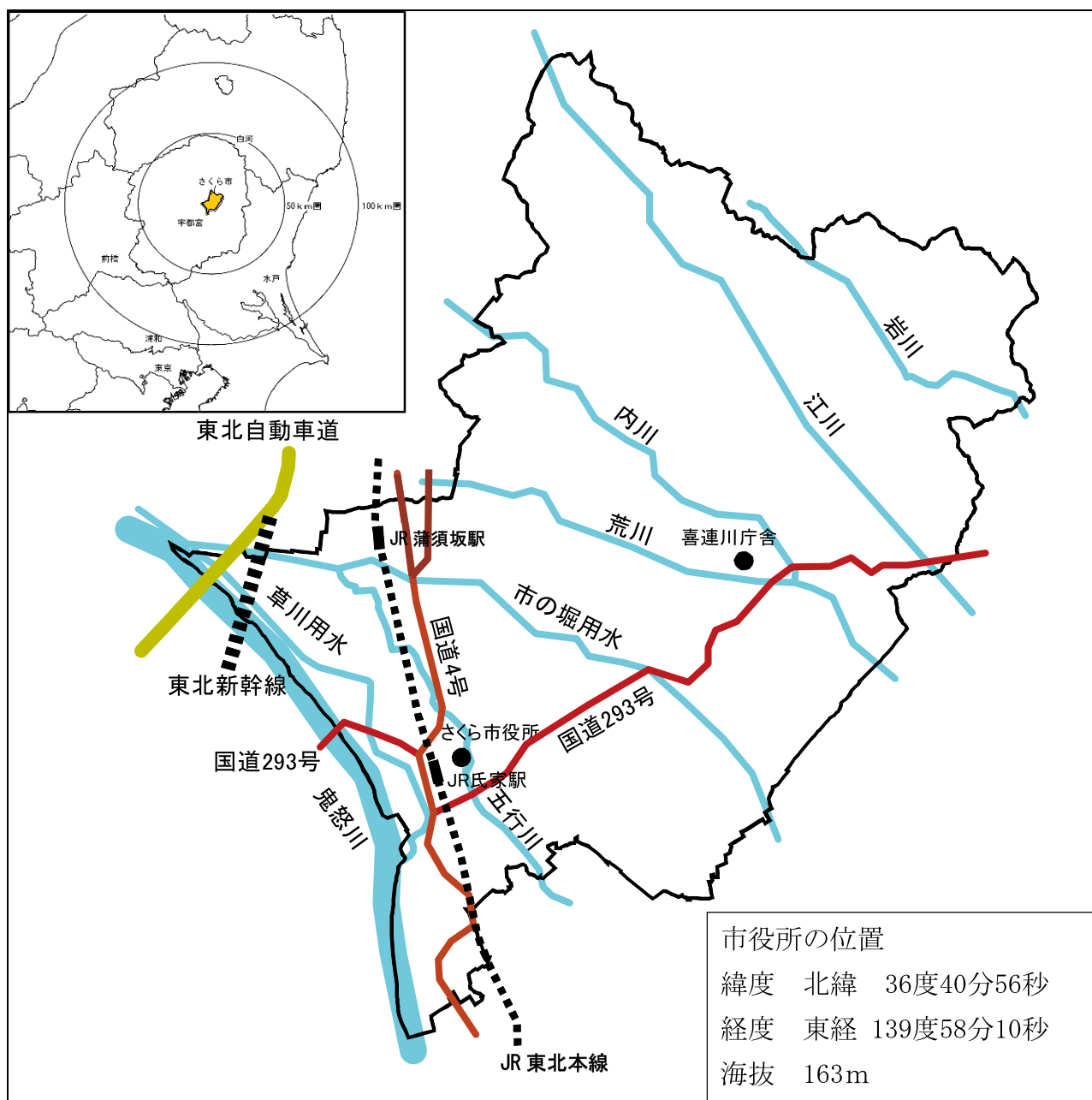
第2章 さくら市の概況

第1節 位置と面積

本市は、栃木県の中央部に位置し、南北は17.8km、東西は15.6km、面積は125.46km²、東京から北に約115kmの距離にあり、県庁所在地の宇都宮市に隣接しています。

氏家地区は関東平野の最北部に位置し、肥沃で平坦な土地と鬼怒川をはじめとした豊富な水を利用した農業が盛んな地域です。

喜連川地区は丘陵地と水田、河川により形成される里地・里山*風景の美しい自然に恵まれた地域です。



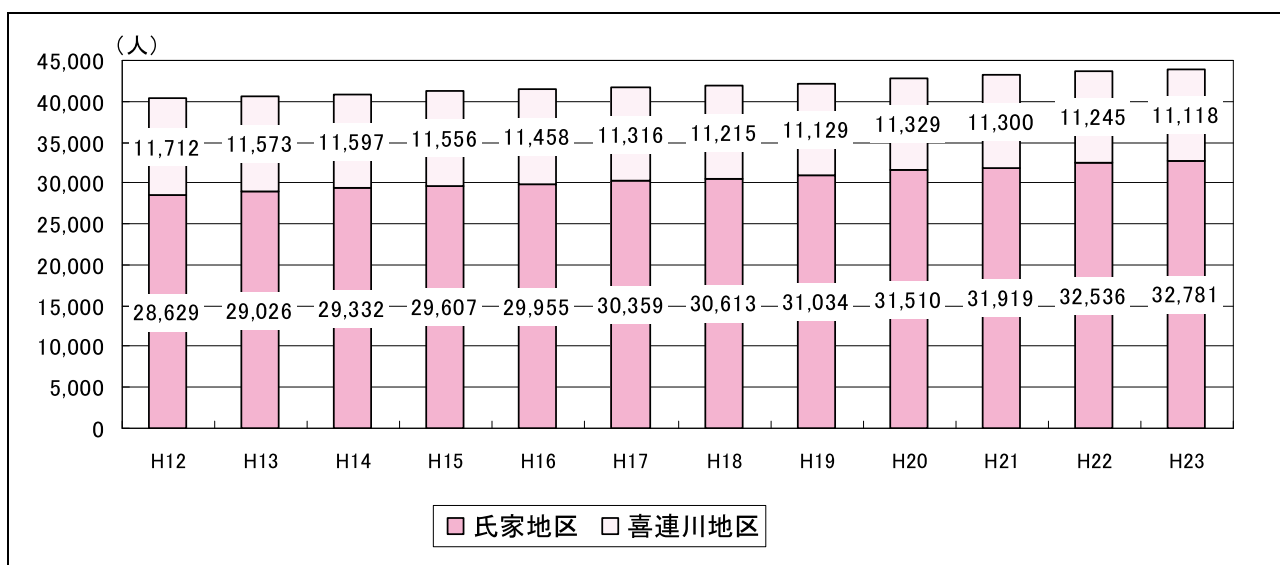
第2節 人口の推移

本市の人口及び世帯数の推移を下図に示します。本市の人口及び世帯数は前期計画策定後も増加を続けていましたが、平成23年は横ばいとなっています。

日本全体としては、人口の減少と少子高齢化等により、核家族化の進行やひとり暮らしの世帯が増加するなど、資源、エネルギー使用の非効率化が懸念されています。

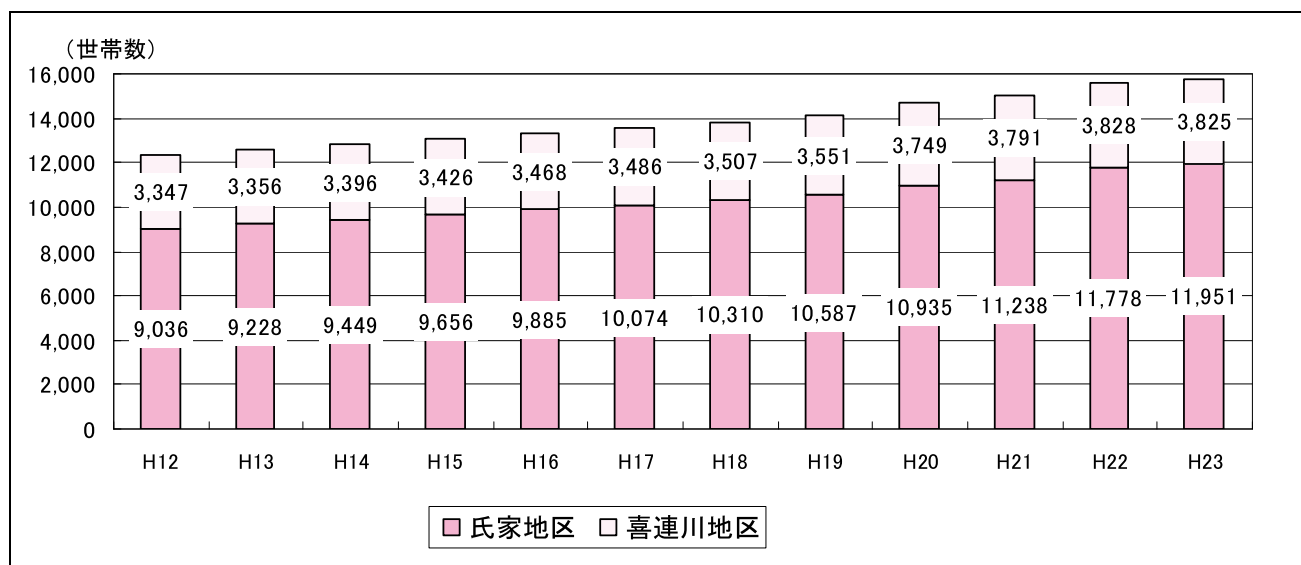
本市においては、住宅地の整備などによる世帯の増加に伴い資源の消費量、一般廃棄物*量ともわずかながら増加傾向にあり、1人あたりの資源、エネルギー使用量を削減することが望まれます。

【人口の推移】



※平成12年～平成16年は旧氏家町、旧喜連川町のデータ
出典：さくら市（各年4月1日現在の住民基本台帳）

【世帯数の推移】



※平成12年～平成16年は旧氏家町、旧喜連川町のデータ
出典：さくら市（各年4月1日現在の住民基本台帳）

第3節 産業の概況

1. 産業別就業者数の推移

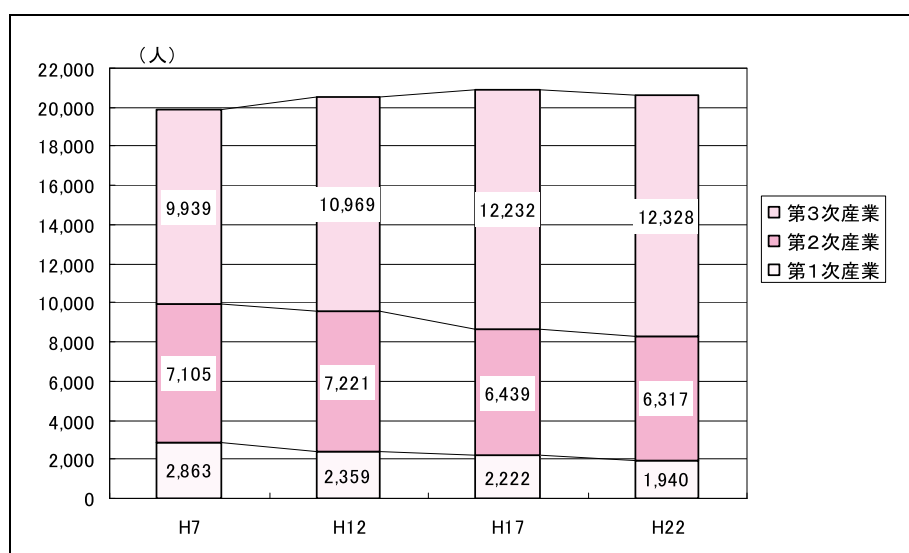
本市における産業別就業者数の推移を下図に示します。

前期計画策定時には、少子高齢化の進行により労働人口の減少が予測されていましたが、実際に平成17年度と比較して平成22年度では約300人労働人口が減少しています。

各分類の比率については、第1次産業と第2次産業が減少して第3次産業が増加する傾向が変わらず続いています。

持続可能な社会の構築には企業の誘致や労働人口の増加を図り、経済的発展と同時に環境的側面にも配慮した経済と環境の両立を図ることが必要です。有限な資源の消費を防ぎ、循環型資源を有効に活用するなど、環境と経済の好循環システムの構築が望まれます。

【産業別就業者数の推移】



※第1次産業・・・「農業」、「林業」、「漁業」
第2次産業・・・「鉱業」、「建設業」、「製造業」
第3次産業・・・「電気・ガス・熱供給・水道業」、「運輸・通信業」、「卸売・小売業、飲食店」、「金融・保険業」、「不動産業」、「サービス業」、「公務（他に分類されないもの）」

出典：国勢調査



【中心市街地の風景】

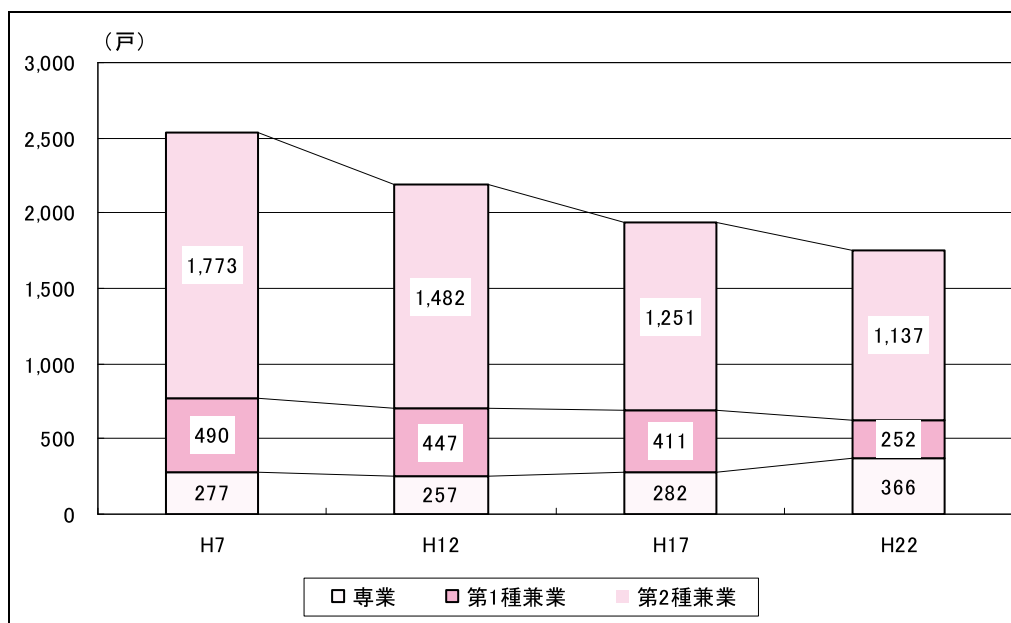
2. 農業

本市における専業・兼業別農家数の推移を下図に示します。農家数の減少は前期計画策定後も続いています。専業農家は増加しています。

日本全体の食料自給率は39%と少なく、将来の地球温暖化による食料不足の懸念改善や環境への負荷低減を図る上でも自給率の向上が緊急の課題となっています。

本市は、肥沃な大地を活用した農業が盛んな地域であり、有機農法による商品価値の向上や生産効率の向上及び地産地消などの環境配慮を推進し、農業の活性化による農家数の増加を図ることが望まれます。環境に配慮した農業の推進は自然環境の保全であり、生態系の維持のため重要な役割を担います。

【専業・兼業別農家数の推移】



※第1種兼業・・・農業所得を主とする
 第2種兼業・・・農業所得を従とする

出典：農林業センサス

※食料自給率

ここでは、農林水産省発表の「平成23年度カロリーベース食料自給率」を示します。



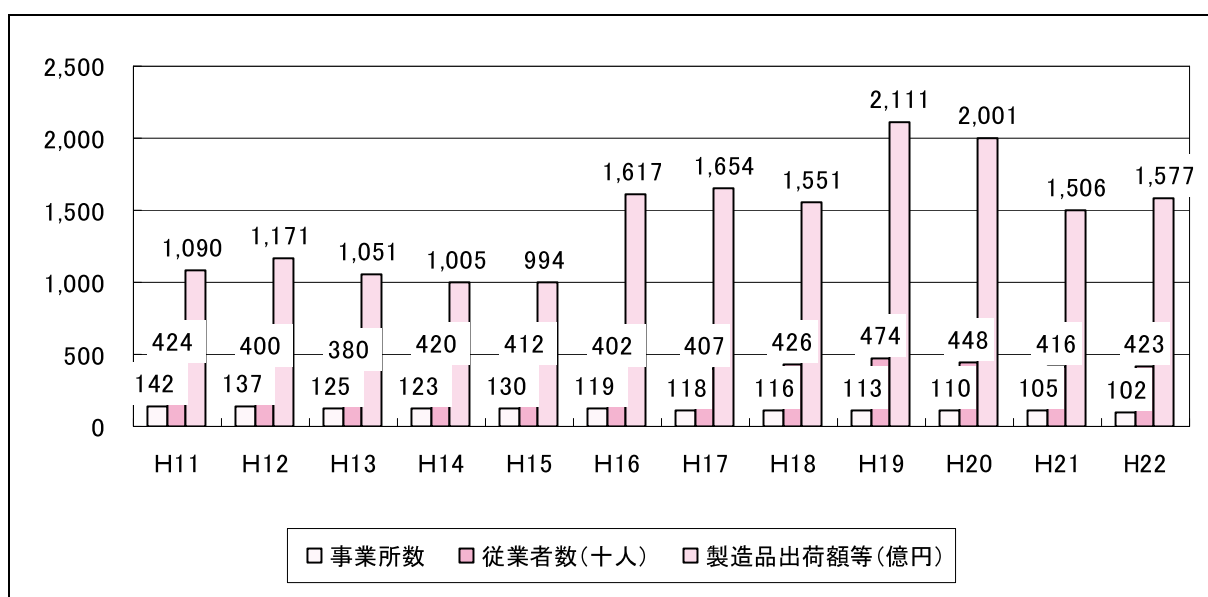
【豊かな田園風景】

3. 工業

本市における事業所数、従業者数、製造品出荷額等（いずれも従業者4人以上の事業所）の推移を下図に示します。従業者数、製造品出荷額等とも平成19年度に増加しましたが、それ以降は減少しています。事業所数は減少を続けています。

製品の製造過程における環境負荷の低減やグリーン購入*の導入は循環型社会*を実現するための根幹を担うものであり、消費者ニーズのひとつとなりつつあります。品質、価格とともに環境にも配慮した製品作りによる資源、エネルギー使用の効率化向上が望まれます。

【工業の推移】



出典：工業統計調査



【蒲須坂工業団地】



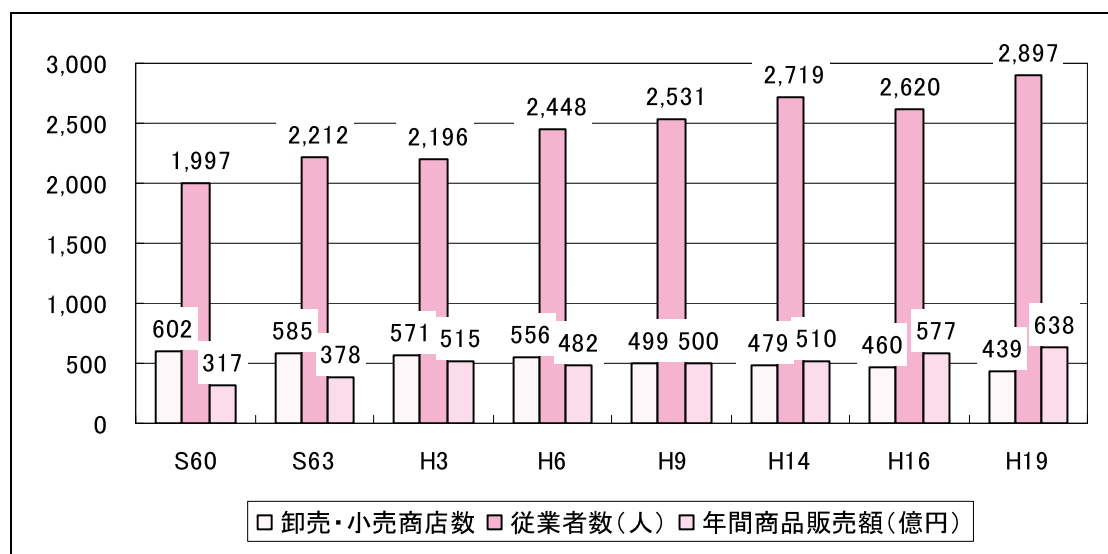
【喜連川工業団地】

4. 商業

本市における卸売・小売商店数、従業者数、年間商品販売額の平成 19 年度までの推移を下图に示します。卸売・小売商店数は減少、従業者数、年間商品販売額は増加する傾向が続いています。

本市においても商業施設の大規模化が進み、エネルギーの使用量増加や交通渋滞による大気汚染など都市化の進行による環境問題の顕在化が推測され、まちづくりや商業施設建設の計画段階での環境への配慮を推進し、未然防止を図ることが望まれます。

【商業の推移】



出典： 商業統計調査



【国道 4 号沿いの商業地】



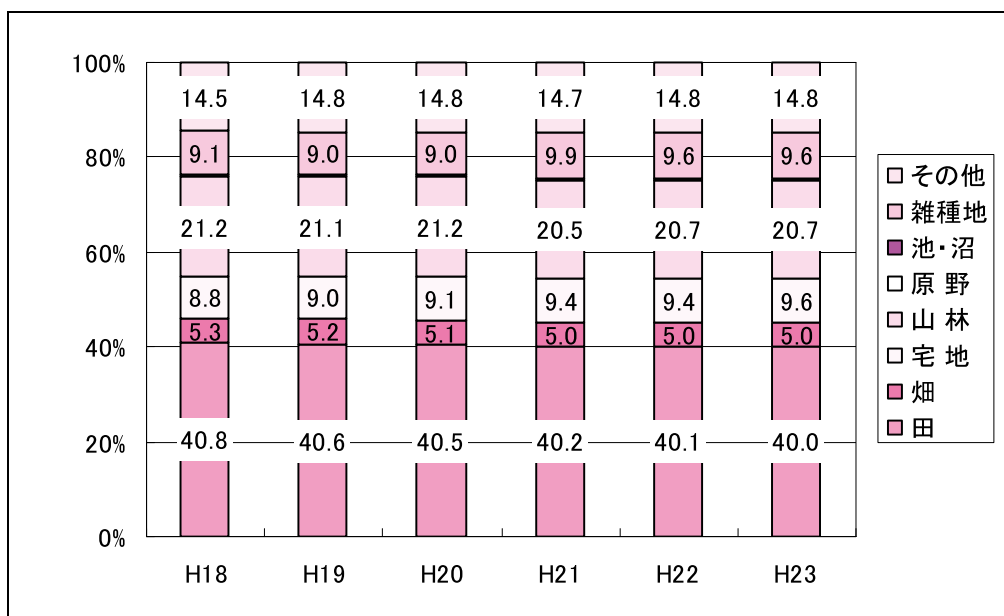
【国道 293 号沿いの商業施設】

第4節 土地利用状況

本市における地目別土地利用状況を下図に示します。本市は、肥沃な大地を利用した農業が盛んであり、「田」が市域全体の約 40%と広い面積を占めています。次いで「山林」、「宅地」、「雑種地」、「畑」と続いています。

本市は、国道 4 号や国道 293 号、J R 東北本線など交通の便が良いために、宅地や商業施設としての土地開発が進行し、田畑等が減少しています。今後も企業の進出や宅地の整備等土地の開発が増加することが考えられ、土地利用計画にもとづく計画的な土地利用と自然環境の維持・保全を図ることが望まれます。

【地目別土地利用状況】



※出典： さくら市



【宅地、田園、山林の様子】

第5節 動植物の概況

本市では、「さくら市自然環境調査」と題しまして、平成21年度から平成23年度にかけて動物（哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫類）並びに植物について現地調査を行いました。調査は、全6地点で行い、本市を代表する自然環境である市内北部の里山林、河川沿いの河原や河畔林、市内南部の水田地帯の自然環境を把握しました。以下に概況を示します。

【調査地点位置図】



丘陵地（調査地点①、②、③）

本市の丘陵地は、スギ・ヒノキの植林が大半を占めていますが、一部にはまとまった落葉広葉樹林もあります。また、谷部には開けた谷津田が広がっているほか、多くの林が河川、水田等の水辺環境と隣接していて、多様な自然環境を形成しています。その中で多くの種を確認することができました。

具体的には、鳥類であるサンショウクイや、シュレーゲルアオガエル等の両生類、アオダイショウやヤマカガシ等の爬虫類、オオムラサキ、ヨツボシカミキリ、ヒメアカネ、オオヒラタトックリゴミムシ、ホンサナエ、ツマグロキチョウ等の昆虫類、オトコゼリ、ヒメナエ、アギナシ、トキホコリ、ヌマゼリ、ツルカコソウ、エビネ等の植物といった貴重な種も多く確認されています。

河川（調査地点④）

本市を代表する河川の一つである鬼怒川の河川敷で調査を実施しました。河川敷の一部にはアカマツ林が優占する河畔林やススキの草地が広がっています。ここでは、河川環境に特有な生物が多数確認され、鳥類ではオオタカ、両生類ではニホンアカガエル等、爬虫類ではヤマカガシ等、昆虫類ではカワラバッタ、アイヌハンミョウ等、植物ではカワラノギク、カワラニガナ等が確認されました。調査地④は、本市の土地利用のゾーニングでは、自然環境保全ゾーンに該当しています。

水田（調査地点⑤、⑥）

本市南部の大部分は水田地帯であり、その中を大小様々な水路が走っています。また、小規模ではありますが社寺林や屋敷林などが点在しています。ここでは、水田環境にみられる貴重な動植物が多く確認され、オオタカ、コチョウゲンボウといった鳥類、ニホンアカガエル等の両生類、爬虫類ではシマヘビ、昆虫類ではマイコアカネ、植物ではミズニラ、ハタベカンガレイ等が確認されました。これらの種の多くは、現状の季節的な周期に適応している種が多いため、極力大きな開発行為は避けて、現状を維持していくことが必要です。

また、鬼怒川河川敷で広範囲にみられる礫河原*では、本市の天然記念物であり、シンボリック的存在となっている蝶のシルビアシジミなどが生息しています。氏家大橋上流やゆうゆうパークとその周辺には、鬼怒川河川敷に固有な植物であるカワラノギクやシルビアシジミの食草であるミヤコグサなどの保全地があり、これらの生息環境を脅かすシナダレスズメガヤやオオキンケイギクの駆除作業が自然環境保護団体等により継続されています。なお、現在、栃木県において関東有数の礫河原を有する鬼怒川中流域の一部（さくら市を含む）を自然環境保全地域の特別地区への指定に向けて調整を図っているところです。

そのほか、前期計画で保全が必要な場所とした河戸新田地区のため池周辺では、里地里山*の環境保全団体等によるカキツバタなどの保全活動が行われています。活動では林縁部に密集して生えたヨシやガマを取り除くとともに、隣接地に自生しているハンノキ林の実生が発生しやすい環

境を創出しています。また、貴重なミズニラやツルカコソウといった植物のほか本市の天然記念物に指定されている甲虫のアカガネネクイハムシの生息地であるなど、今後も保全が必要な場所となっています。

さらに、市内においては近年、県内固有の新種として発表されたシモツケコウホネが自生していることが分かり、その保護対策について、国や市、並びに地元住民等による検討が行われています。本種の生育は、太古の昔より湧水が維持されてきたことを示し、本市の自然環境を特徴付ける上で大変貴重な発見と言えます。

自然環境は、調査地への直接的な開発行為の他に、周辺の環境変化にも影響を受けます。また、気温や湿度の変化、水質・大気質等の微細な化学的性質の変化にも影響を受ける場合があります。

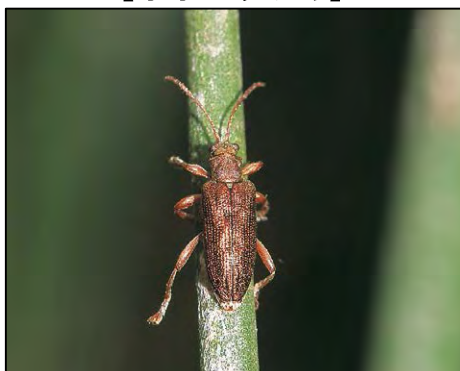
環境の変化による生息・生育する生物への影響を察知するため、かつ、本市の生物多様性*や貴重な動植物を適切に保全していくために、今後も5年に1回程度の頻度で自然環境調査を実施し、経年変化を確認する必要があります。



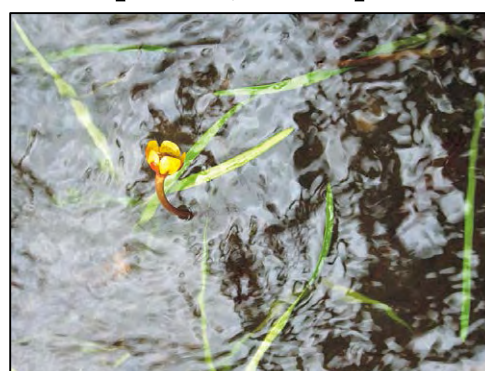
【オオムラサキ】



【シルビアシジミ】



【アカガネネクイハムシ】



【シモツケコウホネ】



【鬼怒川礫河原の風景】

